

国語の教科書は捨ててはいけない

本日は、みやざき中央新聞の社説を参考にして話を紹介します。

その本との出会いはあまりにも偶然だった。

捨てるつもりで他の本と一緒に束ねてひもでしばろうとしたとき、その手をちょっと休めてパラパラとめくっていたら、以外と面白くて、しばし読みふけてしまった。

かくしてその本は資源ゴミ行きを寸前のところで免れ、編集部の本棚の一冊に格上げされた。「その本」とは、息子の中学時代の国語の教科書である。（ちなみに、私が手に持っている本は、私が小学校4年の時に使っていた50年前の参考書です）

自分が中学や高校時代、国語の教科書をおもしろいと思ったことは一度もなかった。きっと「勉強」という枠組みの中で読んでいたからだろう。

中村 佳子さんという生物学者が3年生の教科書のために書き下ろした『生き物として生きる』という文章があった。

祖父母の時代、親の時代と比べると、今は比較にならないほど便利な世の中になっている。

とどのつまり、人間はあらゆるものを思い通りに作ってきたということだ。

「空が飛べたらいいな」という夢を持った人が、やがて「どうしたら飛べる」と考え始め、作り始めたら、それがいつしか飛行機になった。

車も、テレビもスマホも、似たような経緯を経て、それぞれの分野の技術者が思いどおりに作ったものだ。AIの技術もそうだ。

機械だけじゃない。昔の農業は苗を植え、水をやって農作物を育てていたが、近年、生産者は「野菜を作る」という言い方をするようになった。

そこには、「自分たちに思いどおりのものを作りたいという気持ちが入っている」と中村さんは言う。

農作物だけじゃない。昔は「子供を授かる」と言っていたが、今は「子どもを作る」という人が多い。

日進月歩の技術革新はとどまることを知らない。つまり、「こうゆうことができたらいいな」という夢や理想をあげたら、次の時代にそれは実現しているのである。

中村さんは「その先」に憂いを抱いている。たとえば、「生まれてくる子どもの髪の毛の色や、目の色を望みどおりにしたい」という人たちが増え始めたら、その願いに医療技術は応えようと進歩していくのではないか。

そして、「何でもかんでも思いどおりにしたいという気持ちには、歯止めをかける必要がある」と中村さんは主張する。

実は、自分が「おもしろい」と思ったのは、この文章だけではなかった。国語の教科書を読んで泣くなんて考えられないが、きっと「勉強」という枠組みから解放されているからだと思う。

まとめになりますが。。。。

皆さんにとっての授業はたのしいですか？ 簡単には決められないですよ。しかし、楽しく学ぶには、皆さんの見方・考え方次第でもあるのではないのでしょうか。

もう一つ、国語の教科書は大人になったとき、とても素敵な読み物になる。決して資源ごみにしてはいけない。

今日の話はこれで終了です。